

都市の庭化

- 心と身の還れる居場所 -

準会員 菊地ゆかり
日本女子大学大学院宮晶子研究室

01 はじめに

人には、日々のストレス、様々な悲しみや困難に対し、海を眺めたり、空を見たり、山に行ったり、悠久の自然と対話することで、身の回りで起きる様々な出来事や己を俯瞰し、自己を回復していく瞬間があるのではないだろうか。私自身、自宅から歩いて行ける距離に海があり、その存在やそこでの体験は、私の心と身体にとって大変大きな意味を持っていた。その体験がもたらしてくれるものは、自分を取り巻くより大きな世界、例えば自然や環境と一体となりながら、同時に大きな流れの一部として、自分の存在を捉えなおし位置づけるという俯瞰的な感覚であり、このような体験が、人には時に必要であることを私は身をもって体験した。一方、雄大な自然と対峙する機会の少ない都市部においては、先のような体験が成される場は少なく、草花や木々など比較的的自然が残る公園でさえ、その使われ方などを見ても、訪れる人にとって本当の意味での心の拠り所となっているかは疑問である。本研究では、自然環境に限られた現代都市において、建築を紹介し、人が、物事や自分自身の存在を客観的に捉えなおし、環境と一体となりながら、自己に回帰できるような居場所・空間を提案する。必要としている人が、必要な時、好きなだけ、居ることができる、そんな居場所を私は都市の中に創りたい。

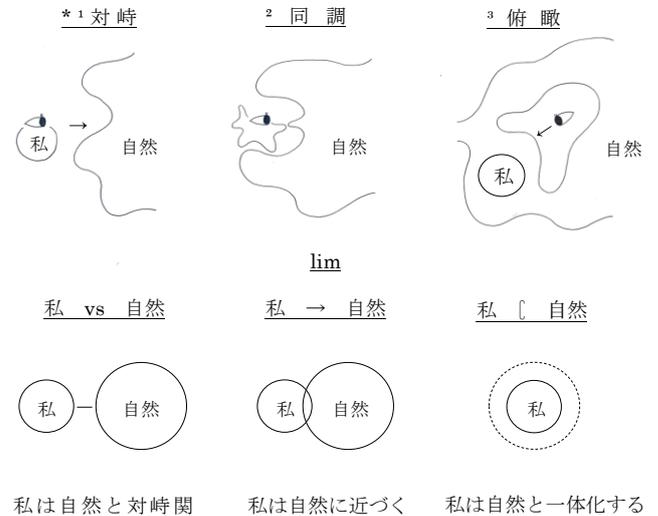
02 背景分析

1) 東洋における自然観と私見

東洋的自然観では、「自然は、古来より人間にとって心のふるさとのようなものであり、人は自然に抱かれ、自然と心を通わせることによって、心の安らぎを覚えるもの¹⁾」として捉えられている。近代の西洋的自然観とは異なる伝統で、自然が生命をもつという考え方も中国、日本を代表とする東アジアの文明において最も発達していると言われている。さらに、心とからだについての捉え方として東洋哲学、特に仏教の世界では、心と身体は常に同時に働き、一の如し(心身(しんじん)一如(いちにょ)の世界)と言われる。このように、人は自然と触れ合い空間的にも、例えば森の中にいる時のように自然に包まれることに幸福感や安らぎを覚えるようであるが、「自然に抱かれる」体験とはそれだけではない。「自然を眺望的に捉えながらも心理的に抱かれている」と感じられる瞬間がある。この感覚がまさに私が「海」で体験してきた感覚であり、それは、古来より草木や花を設え床の間に小宇宙を見出してきた我々日本人の祖先と相通する部分なのかもしれない。自然に限らず、人が物事や人間関係など、ある環境を心地よいものとして受け入れるためには、それとのあいだにある程度の距離感が必要で、環境を自らの意志によって近づけたり遠ざけたりする中で、人は自己の存立を確かなものとして実感することができるの

Making a city like Eastern Philosophy's "garden" - whereabouts that your mind and the body

can return to you -
Yukari Kikuchi
Japan Women's University Professor Miya Akiko's Laboratory



【図1. 海における私と自然の体験イメージ】

*海での体験を時系列にそって記述する。

ではないだろうか。環境が近づき過ぎて窮屈になっている時には、一歩引いてみることも大切で、対面する事象を俯瞰的に捉えることで、己さえも俯瞰的に捉えることができ、“私”は失いつつある自己を取り戻すことが出来るのだと考えている。

2) 個人的な意味としての「庭」の意義

庭とは、ある輪郭をもって植物などを設えたものを指すのだけではなく、「新宿は私の庭です」と言った具合に特定の領域を示したり、外部の様々な要素との有機的結合関係性を表したりするものである。ランドスケープデザイナーの石川初氏によれば「庭は、公共空間ではなく、誰かが主体的に関与し働きかけることで何らかの『関係』を結ぶ対象としてある」。以上より、庭とは必ず個人との関係性のうちに築かれるもので、人が自己を回復していくためには自己と事物との間(物理的距離や心理的距離)を自由に変化させられることが必要であると考えた。個人が各々のタイミングで己を取り巻く事物との距離を自由に変化させ、関係性のうちに自らを見出すためには、いわゆるその人にとって「心の拠り所」と言えるべき場所に還る必要がある。そこには、移ろい行く時の中で私を受け入れてくれる変わらぬ安定と安心感、そして「私の歴史的時間」や「私との絆」が堪えられているのである。このように人は自分と何かしらの関係性をもった場所からであれば、自分や世界を少し俯瞰して捉えることができ、その中にかげがえのない自らの存在もまた見出すことが出来るのではないだろうか。私にとっては、海が庭のようなものであり、そこに還れば私は私に還ることができるのである。喜びの時も悲しみの時も海には私のたくさんの歴史的時間が詰まっているのである。

所在地：東京都文京区目白台 1-16
主な用途：読書スペース
延床面積：42m²
キーワード：都市・海・庭・東洋思想・本

Location : 1-16,Mejirodai,bunkyou-ku,Tokyo
Main Use : Reading space
Total Floor Area : 42 m²
Keywords : city, sea, garden, Eastern Philosophy, book

03 「都市の庭化」を考える

たくさんの事物で溢れ、それらが断片的に混在する都市は不安定なものである。その不安定さは時に我々を息苦しくし、私が都市との距離感を主体的に図ることを困難にする。しかし、そんな都市の中においても一度都市を俯瞰し、その輪郭を捉え一時の間でも安定的に捉える事ができれば、人は都市の中に自己を成立させ己に回帰することができるのではないだろうか。

1) 敷地／都市の俯瞰

都市を歩く中では私はいつもビルに見下ろされ、次から次へと過ぎては消えていく多くの情報にさらされているのだが、建物と建物との切れ間から、ふと眺望的に都市を捉えることが出来る時がある。このことは東京という大都市が意外にも豊かな地形を持っていることと



深く関係している。本研究で対象敷地を選んだのは、東京都文京区にある区立目白台一丁目子供の遊び場である。敷地周辺は高台であり、目白通りを背骨にして南に流れる神田川に向かって急斜面が続く土地情勢を持つ。こうした地形により敷地内にも4m程の高低差が生じており、高台の淵からは遠くに新宿のビル群を望むことができる。

2) 本に託す場所との絆・関係性／都市とのつながり

都市の中で起きていること、それは社会全体で起きていることであり世界で起きていることである。流れに身を任せ漂うことも大事だが、一歩立ち止まって考えてみることも時には必要だ。心の中だけで解決できない時には場所を変えてみるのも良いだろう。おそらく「心の拠り所」とはこんな時のためにあるはずだ。生まれ故郷、家族、友人、心の拠り所にも色々あると思うが、そこには必ずと言ってよいほど自分との関係性や絆が堪えられている。本提案では個人の所有していた「本」を寄付というかたちでこの場所に挿入していくことで、I) 個人とこの場所との間に絆・関係性をつくる。また、これらの本が他者の手によって持ち出されたり移動していたりすることでII) 断片的になりつつある現代都市の中でも人とのつながりに気づききっかけをつくる。



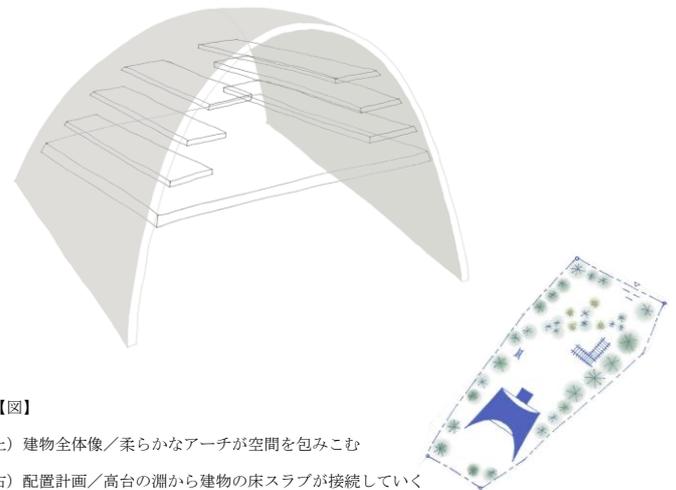
これら「都市の俯瞰」、「都市とのつながり」を通し、つかみ切れないう程広く大きなこの現代都市を、私にとっては地元の海がそうであったように、今少し心を許しあえる存在として自らに引き寄せることができないか考えた。そして、この場所に還れば、自分は都市の中の一部であり、その存在を何より自分自身がしっかりと実感できるようなそんな居場所の一つとして私はこの建築を提案していきたい。

3) 建築計画

建物は眺望方向に抜けをつくり、敷地内の斜面上部分にアーチを築いている。そこに既存の大地から接続して行くように水平の床スラブが入り、アーチの壁に沿って眺望方向に向かって本棚が挿入される。計画はごく日常的な公園という場所に、その公共性や広場スペースを残しながらふと立ち現れるような建築を目指した。



【写真：左上）敷地内の高低差の様子 左下）広場の様子 右）敷地から都市を望む】



【図】

上) 建物全体像／柔らかなアーチが空間を包みこむ

右) 配置計画／高台の淵から建物の床スラブが接続していく

下) 断面計画／斜面から立ち上がるアーチの壁は床スラブによって二つの領域に分けられる



参考文献

- 1) 目幸整徳・黒木賢一編 「心理臨床におけるからだー心身一如からの視座」, 朱鷺書房, 2006
- 2) 石川初 「ランドスケール・ブッカー地上へのまなざし」, LIXIL 出版, 2012